



▲ NS2-2000 (200トン)



▲ NS2-2500 (250トン)



▲ サーボプレス DSF-N2-1600 (160トン)

が、仕事量が増え、大きいプレス機が必要になってくると、差は歴然とした。故障が少なく金型寿命も延びるなど、ランニングコストを低く抑えられることも分かった。こうした理由からプレス機の中でもとくに同社で大型機と呼ぶ加圧能力100トン以上のものはAIDA製を優先して導入するようになった。

AIDAのプレスが仕事を呼ぶ

「AIDAさんのプレス機を使うようになって分かったのは『設備が仕事を呼ぶ』ということです。自動車関連のお客様企業へ行くと、当社と同じ機械を使っているところが多いものです。200トン前後のプレス機はなおさらその感じがします。すると、『うちではこういうものをつくっているが、おたくでもできるのではないか』と商談が弾むのです。後発である当社が自動車関連分野に参入できたのは、AIDAさんのおかげといっても過言ではありません」(遠藤社長)。

現在の主な生産品は、EV車・HV車向けの機能部品、外枠、バスバー、ターミナル系など。ほかにもハーネスの端子などの小物もつくっている。同社の強みは、社内で金型の設計製作からプレス加工まで一貫して行えること。事業の中心は自動車部品加工であり、中でも銅の精密加工部品が売上の8割を占め、毎月約100トンの銅材や銅合金材を加工している。

5工場分のスペースを確保

こうした半面、過去には困った問題も起きた。同社が立地するのは工業団地内なので近隣住民から騒

音などで苦情がくることもなく、工場としては恵まれた環境にある。電力にも強く、停電したこともないという。「唯一の問題は場所(スペース)が限られ、材料にしろ、仕掛品や完成品にしろ、置く場所に困ったことです。それが原因でせっかくの仕事を失注したこともありました。スペースがないと、欲しい設備も入れることができないのです」(遠藤社長)。その問題を解消したのは、後継者がいないなどの理由で閉鎖されることになった隣接工場を買い取ることであった。年月はかかったものの、今ではもともとあった同社の工場を含め、5工場分のスペースを確保した。それによりモノの置き場所に困らなくなり、比較的大きなプレス機なども導入できるようになった。

AIDAのプレス機が主力を担う

同社には5台のAIDA製プレス機がある。150トンC型フレームの「NC1-1500」、同200トンの「NC1-2000」、200トンストレートサイドフレームの「NS2-2000」、同250トンの「NS2-2500」、そして160トンサーボプレスの「DSF-N2-1600」であり、今や同社の屋台骨を支える自動車部品加工の主力を担う機種である。

5台のプレス機のうち、最も新しいのは2021年に導入した160トンサーボプレスである。板厚2.6～3.0mmの銅材を使用したEV車向け機能部品の引き合いがあり、それに応えるためであった。オーダー数は月間約100万個。顧客からは±100分の1の精度が求められた。この要望に応えるには、プレス機はSPM100で回す必要がある。しかし、160トンクラスのメカプレス

■ 製品例：精密銅加工を主体に金型設計からプレス加工まで一貫体制でご要望にお応えいたします。

